

公共政策研究科修士2年 小川洋輔さん

地元では「観光交流協会」会長…「まちおこし」を胸に

2004年創設された中央大学大学院公共政策研究科。公共政策専攻修士課程2年の小川洋輔さんは1期生になる。じつは「65歳の大学院生」である。もう一つの顔は、静岡県東部の町、長泉町の「ながいずみ観光交流協会」会長。研究成果をまちおこしに——ツヤツヤとした表情が、「産学」体の充実した研究生生活を物語っているようだった。

学生記者 植松歩美(総合政策学部3年)

長泉町は三島市や沼津市などに隣接する人口4万人の町。小川さんは、三島市の隣、函南町出身だそう。なぜ、長泉町でまちおこしを？

「もともと、地元企業で役員をしていました。そんな関係で、退職後の1999年に(長泉町にある)ベールナール・ビュフェ美術館の常務理事に就任しました」

フランスの画家、ビュフェのコレ



小川洋輔さん

クションでは世界最大級、初期から晩年までの作品約2000点を所蔵する美術館だが、来館者数はここでも減少傾向にあった。小川理事は、これまでの美術館活動を転換する必要性を肌で感じた、という。

「来館してくれのお客さまのことだけを考えるのではなく、そもそも美術館の収集品というのは地域のみなさんのものなんだと考え、行政・町民と協働しての館外活動に積極的に取り組むようになりました」

01年の「伊豆新世紀創造祭」で、関係者の間に伊豆を何とかしなければという機運が生まれていた。

そこで、美術館・行政・サークル団体の活動が融合して誕生したのが、01年の「するがプレイフェスタ」。このイベントでは、美術館に隣接する自然公園でたくさんの子どもたち

が、ラリーをしたり、紙ヒコーキを飛ばすなどして楽しんだ。さらに、美術館独自の発想で「趣楽市」という、趣味で作られた作品を販売するイベントも。コンセプトは「プリマをちよつとアートに変身!!」。

こうした活性化プランを実行に移しながら、町とともに「観光交流協会」設立に動き、今年4月発足、小川さんは初代会長に就いた。

11月26日開催の「長泉町産業祭」では、長泉町の特産品を象った「美味(うみやう)戦隊 トクサンジャー」といったキャラクターも登場し、盛り上がったという。

さまざまイベント開催など、いろいろと苦労があたりでは？

「みな個性があってそれぞれ“言葉”をもっているから、それをまとめるのは大変といえば、大変。た

だ、きれいな合意形成ができてからスタートしなくてもいいと思うんですよ。『わいわいがやがや』のまま、とりあえずスタートする。すると、そこから『わくわくどきどき』が残っていく」と、小川流を披露。自己分析すれば、元来が「熱血漢」だそう。地元への思い、そして学問への探求心。昭和17年生まれの小川さんは、「平成17年に生まれ変わりたい」との思いから、もう一度大学での勉強を決意したそう。

幅広い付き合いから、大学教授や町おこしに携わっている人たちの話も披露しながら、「人生の節目でお世話になった人の中で、今でもお付き合いが続いているのは、何故か中央大学出身の人が多いんですよ」と小川さん。

それも、中央大学大学院を選んだ理由のひとつとなったらしい。今の中大生はどんなカラーに見えますか？

「うーん。中大の学生さんというのは、控えめ、というのか、なかなか自分を出さないよね。実力のある人は多いのだけど……」

思わず、記者も同感。

修士論文のテーマは、『静岡県内の公共空間の新しい展開』だそう。『ながいずみ』のさらなる進化をかけて、元気がいっぱい小川さんの挑戦はつづく。